

アメリカの未来と2020年7月18日 - 第4号

Jeff Pippenger

2023-09-19

千八百六十三

ウライ川によって象徴されているダニエル書8章と9章のメッセージは、1798年に封印が解かれた。8章の預言は9章でガブリエルによって解釈されたが、それは、聖書の中でも最も重要な人の祈りの一つと見なされる祈りをダニエルがささげた後になってからであった。その祈りの中でダニエルは、エレミヤ書で見いだしたことに基づき、エルサレムの荒廃が七十年続くことを悟っていたと述べている。

アハシュエロスの子でメディア人の血筋に属するダリウスがカルデヤの国の王にされたその第一年に、彼の治世の第一年に、私ダニエルは、書物によって、主の言葉が預言者エレミヤに臨み、エルサレムの荒廃が七十年で満ちると告げられていた年数を悟った。ダニエル書 9:1, 2.

エレミヤはまた、その七十年の終わりに、ダリウスの将軍であるキュロスがバビロンを征服する時に、ベルシャザルが死ぬことを指摘した。

この全地は荒れ果て、驚きの的となる。これらの諸国民は七十年のあいだバビロンの王に仕える。そして、七十年が満ちたとき、主は言われる。わたしは彼らの不義のゆえにバビロンの王とその国を罰し、カルデヤ人の地を永遠の荒廃とする。エレミヤ書 25章11、12節。

ダニエルはまた、荒廃の七十年がモーセが記した預言の成就であることを認識した。

まことに、イスラエルのすべてはあなたの律法に背き、離れ去って、あなたの御声に従いませんでした。そのゆえに、神のしもべモーセの律法に記されている呪いと誓いが私たちの上に注がれました。私たちがあなたに対して罪を犯したからです。あなたは、私たちに、また私たちが裁いた裁き司に対して語られた御言葉を、私たちの上にもたらした大いなるわざわいによって確かなものとされました。天の下のどこにも、エルサレムになされたほどのことは、かつてなされたことはありません。モーセの律法に書かれているとおり、このすべてのわざわいが私たちに臨みました。それでも私たちは、私たちの不義から立ち返ってあなたの真理を悟るために、私たちの神、主のみ前に祈りをささげませんでした。ダニエル書 9:11-13

イスラエルが破って「呪い」を生じさせた「誓い」は、レビ記26章の「七つの時」であった。レビ記26章で「七つの時」と訳されている語は、ダニエル書9章で「誓い」と訳されているのと同じヘブライ語である。「七つの時」と訳されている語で表されるモーセの誓いは、ウィリアム・ミラーが見いだした最初の時の預言であり、1863年に退けられた彼の基礎的真理の最初のものであった。ウィリアム・ミラーはエリヤを象徴しており、これは「預言の霊」によって確証されている。

「ウィリアム・ミラーが宣べ伝えた真理を受け入れるように、何千人もの人々が導かれ、神のしもべたちが、エリヤの霊と力によって、そのメッセージを宣べ伝えるため

に起こされた。」『初期の著作』233ページ。

1863年、かつてその運動にいた人々がセブンスデー・アドベンチスト教会を創始したことで、ミラー派運動は終焉を迎えた。彼らが教会として始動したとき、その運動は終わった。レビ記二十六章の「七倍」によって表されているように、彼らがモーセを殺し、同時にその運動にモーセの「誓い」を提示した使者であるエリヤをも殺したとき、それは終わった。モーセとエリヤは1863年に共に殺され、神がFuture for Americaという運動を古き道へと立ち返らせた2001年9月11日以降まで、復活することはなかった。

フューチャー・フォー・アメリカは、2001年9月11日を第三の災いの到来と認識し、9月11日のイスラムの攻撃をそう特定することを裏づけたのは、ミラー派が特定した最初の二つの災いの歴史であり、それは1843年と1850年の両方の先駆者の図表に具体的に示されているとした。イスラムの現代における役割を支持するためにミラー派の歴史に立ち返ることによって、主はそのとき、レビ記26章の「七つの時」についてのフューチャー・フォー・アメリカの理解を開かれた。これは両方の図表の中央の列に図示されている。そして両方の図表において、その中央の列の中心は十字架である。神がハバククの両方の表の作成を導かれたとき、モーセの「誓い」、すなわちレビ記26章の「七つの時」が他のすべての預言的な図解の中心となるようにし、また両方の表でキリストがまさに中心に置かれるようにされた。

これは、ダニエル書九章でガブリエルによって解釈された別の預言に示されている一定の期間と一致しており、その預言は、キリストが一週間のあいだ多くの者と契約を確かなものとするを明らかにしていた。

彼は一週間のあいだ多くの者と契約を堅く定め、週の半ばにいけにえと供え物をやめさせ、忌むべきものの蔓延のゆえにそれを荒廃させる。終局に至るまでそうであり、定められたものが荒廃の上に注ぎかけられる。ダニエル書 9:27

預言の一週間は二千五百二十日という象徴的な期間であり、ガブリエルが説明していた預言は、その二千五百二十日という象徴的な期間の「半ば」、すなわち中心でキリストが十字架にかけられることを示していた。キリストは、ハバククの二つの表における『二五二〇』の中心であり、また、彼が多くの者と契約を確証したその一週間の中心でもある。

1863年、アドベンティズムは教会として発足し、エリヤの霊に力づけられていたミラー派運動は打ち倒された。ミラー派運動は、黙示録の七つの教会という文脈において、自分たちはフィラデルフィアの教会であると理解していた。1844年の大失望の後に彼らから分離した者たちは、ラオデキアと見なされた。1856年、ジェームズ・ホワイトは『レビュー・アンド・ヘラルド』誌上で、フィラデルフィアとして始まった運動がラオデキアになってしまい、会員はラオデキアの教会に示された治療法を求める必要があることを指摘する連載を開始した。同年、同じ刊行物で、ジェームズ・ホワイトは、ハイラム・エドソンによるレビ記二十六章の二千五百二十年の預言に関する連載記事を掲載した。その連載は完結しなかった。

2001年9月11日以後、主がFuture for Americaの運動を古き道へと立ち返らせたとき、エドソンの論考が再発見され、そして歴史上初めて、2520年という二つの期間が二つの呪

いとして認識された。一つは北の十部族に対するもので、もう一つは南の二部族に対するものである。ミラーは南王国ユダに対する「七つの時」を特定していたが、エドソンは北王国イスラエルに対する「七つの時」を特定した。Future for Americaは、その双方が適用されるべきだと見いだした。その二つの離散を組み合わせると、ミラーもエドソンも認識していなかった預言的な光がもたらされる。

主が2001年以降にFuture for Americaを古い道に戻されたとき、モーセの「誓い」は息を吹き返し、立ち上がった。その「誓い」に結び付いたメッセージは、第一の天使の使者たちによって提示され予表されていたのと同様に、第三の天使の使者たちによって提示された。Future for Americaは、「エリヤ」の力にあって「モーセ」によって表されるメッセージを宣べ伝えた運動であり、そして「Habakkuk's Tables」と題された一連の発表が2012年ごろに終わるまで、エリヤは明確にモーセの証しを与え続けた。その一連の発表が終わったとき、底知れぬ淵からの獣が、モーセとエリヤに戦いを挑むために上ってきた。その戦いは、Future for Americaが1996年以来行ってきた働きをやめ、学校を始めることを決めたときに始まった。彼らはその学校を、高慢にも「預言者の学校」と呼んだ。むしろ「偽預言者の学校」と呼ぶべきだった！

主がご自身の使者として認めたことのない者たちに彼ら自身の考えを持ち込むことを学校が許し始めたときに生じた混乱と困惑は、2020年7月18日、フューチャー・フォー・アメリカの死をもって終わりを告げた。その時点で、モーセとエリヤは路上で殺されていた。

そして彼らはその証しを終えると、底知れぬ淵から上ってくる獣が彼らに対して戦いを挑み、彼らに打ち勝って、彼らを殺す。彼らの死体は、大いなる都の大通りに横たわる。その都は霊的にはソドムとエジプトと呼ばれ、そこはまた私たちの主が十字架につけられた所でもある。黙示録 11:7、8。

信頼できる証しとは、『Habakkuk's Tables』という題のシリーズの結びで終わったあの証しである。すると、獣が襲いかかってきた。現在のこれらの記事を誰が追っているのか私には皆目見当がつかないが、読者は『Future for America』の敵と、7月18日の失望をいまだに受け止めようとしている人々とが同程度を占めているのだろうと推測している。したがって、私が敵と定義する部類の者たちは、この預言史の適用が彼らの目にはいかに自己都合に見えるかを指摘してくるだろうと予想している。それでよい。時間はあまりに短い。『Future for America』の歴史がミラー派の運動を型とする運動として明確に示されていないかのように装うには短すぎるし、その運動を率いるために立てられた欠点のあるラオデキア的な人間の使者がウィリアム・ミラーによって型示されていなかったかのように装うにも短すぎる。

ミラーはフィラデルフィア人であり、私は1975年に世からアドベンチズムに入ったので、正真正銘のラオデキアのアドベンチストです。私の人生の歩みはその事実を証ししています。とはいえ、憐れみ深い天の神は最近、いま明らかにしておられるメッセージを書き記し、それを諸教会に送るよう私に命じられました。そのお命じには、神がモーセとエリヤをよみがえらせる時、彼らはラオデキア人としてではなくフィラデルフィア人としてよみがえらされる、という約束が伴っていました。ミラー派の歴史の中で始まったその運

動はフィラデルフィアの時代でしたが、1856年にミラー派が据えた基礎を退ける過程を開始したとき、最終的にラオデキアへと移行しました。拒絶は、ハイラム・エドソンの筆を通して与えられた新しい光の展開を棚上げすることから始まりました。七年後の1863年、モーセのメッセージを提示していたエリヤの運動は殺されました。同時に、その運動に取って代わる教会が設立されました。モーセとエリヤはアドベンチズムの始まりに殺され、そしてアドベンチズムの終わりにも再び殺されました。

預言的なラオデキアの終局にあたる1989年、ヒデケル川の幻の封印が解かれ、ラオデキア的な母体から生まれた運動が始まった。主は不意を突かれたのではなく、三天使の働きを始められたとおりに終えられることをご存じであった。主はそれを、始めと同じくフィラデルフィア人の運動で終えられるのであり、そのためには、生まれながらにラオデキア的であったその運動がいったん殺され、フィラデルフィア人として復活しなければならなかった。こうして、ラオデキア教会から出てきたその運動は、「三重の連合」が「七つに属する八番目」となるそのまさに同じ歴史において、自らも「七つに属する八番目」となる。そして同じ歴史において、共和主義の角もまた、エジプトとソドムの「ウォーク主義」によって殺されていた「七つに属する八番目」の復活を経験するだろうが、その系統の預言については後の稿で扱う。

また、あらゆる民族、部族、言語、国々の人々は、三日半の間、彼らの死体を見、彼らの死体が墓に葬られるのを許さない。地に住む者たちは彼らのことで喜び楽しみ、互いに贈り物を送り合う。これは、この二人の預言者が地に住む者たちを苦しめたからである。ところが三日半の後、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは立ち上がった。彼らを見た者たちの上に大いなる恐れが臨んだ。ヨハネの黙示録 11:9-11.

Future for America は墓に葬られたのではなく、その見かけ上の死をその敵たちが喜んでいる間、殺されたその場所である通りにただ横たわっていた。ところが「三日半ののち、神からのいのちの息が彼らのうちに入ったので、彼らは自分の足で立った」。時はもはやないので、この三日半は、黙示録十二章六節と十四節で聖所と軍勢が踏みにじられた荒野を表す千二百六十日または千二百六十年の象徴である。もし彼らが墓に入れられていたなら、踏みにじられるような通りにはいなかっただろう。Future for America の踏みにじりの期間は、単なる象徴的な期間であるだけでなく、モーセの誓いによって表された「七たび」のメッセージの象徴的期間でもある。

また、彼らは剣の刃に倒れ、捕囚として万国に連れ去られる。エルサレムは、異邦人の時の満ちるまで、異邦人に踏みにじられる。ルカ 21:24

エルサレムが踏みにじられたのは三度あった。最初は紀元前677年から紀元前607年までのバビロンによるもの。二度目の踏みにじりは西暦66年から70年までの異教ローマによるもの。三度目は西暦538年から1798年に至るまでの霊的ローマによるものであった。ルカ21章で示されている異邦人によるエルサレムの踏みにじりは、教皇支配の1260年間を指している。モーセとエリヤの証しが見いだされる黙示録11章は、その期間の特定から始まる。

そして、わたしに杖のような葦が一本与えられた。御使いが立って言った、「起きて、神の神殿と祭壇と、その中で礼拝する者たちとを測れ。しかし、神殿の外庭は除い

て、これを測ってはならない。これは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月の間、聖なる都を踏みにじるであろう。」ヨハネの黙示録 11:1, 2.

ヨハネに神殿とその中で礼拝する者たちを測るように命じられたことは、1844年に審判が始まったことを表している。というのも、その直前の二節は、ヨハネが1844年の大失望の苦さを経験したことを示し、その後、彼がそのメッセージを宣べ伝える働きを繰り返さなければならないと告げられ、さらに第十一章の第一節で、審判が始まったばかりであることが示されるからである。

揺り動かすことのできるものはすべて揺り動かされ、揺り動かされないものだけが残る時が来た。一つひとつの事柄は神の前で審査に付されつつある。というのも、神は神の宮と、その中の礼拝者たちを測っておられるからである。「右の手に七つの星を持ち、七つの金の燭台の間を歩む方がこう言われる。『わたしはあなたの行いを知っている……。あなたに対して言うべきことがある。あなたは初めの愛を失ってしまった。だから、どこから落ちたかを思い起こし、悔い改め、初めの行いをしなさい。そうでなければ、わたしはすぐにあなたのところに行き、燭台をその場所から取りのけてしまう。』」 「悔い改めなさい。そうでなければ、わたしはすぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣であなたに立ち向かう。耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者には、隠されたマナを食べさせ、白い小石を与えよう。その小石には新しい名が記されており、それを受ける者のほかはだれもそれを知らない。」 1888年の資料、1116.

ヨハネが1844年における調査審判の開始を示している箇所、彼は神殿の外庭を除外するように告げられる。そこは異邦人に与えられており、彼らは聖なる都を千二百六十年のあいだ踏みにじるからである。ルカ二十一章は、異邦人の「時」が満ちるまで、異邦人がエルサレムを踏みにじることを示している。ヨハネは十一章で、異邦人によるエルサレム踏みにじりの時期が538年から1798年に及ぶ歴史であったことを明らかにしている。さらに十二章でヨハネは、この期間を二度にわたり「荒野」として示し、教会が教皇による迫害を避けるために逃れ込んだ時期であると述べている。

モーセとエリヤが殺され、三日半のあいだ踏みにじられるまま通りに放置されるとき、過去にエルサレムが踏みにじられた三つの歴史的出来事は、その期間を象徴するものとして理解されるべきである。ルカ21章では、異邦人の「時」が満ちるまで、聖なる都は異邦人に踏みにじられると述べられている。

このように、ルカは複数の「異邦人の時」を示しているが、「異邦人の時」が満ちたのは1798年であることを私たちは知っている。最初の「異邦人の時」は、紀元前723年、イスラエル北王国がアッシリアによって踏みにじられたときに始まった。その踏みにじりは異教勢力による踏みにじりの始まりであり、538年まで続いた。そこで教皇権がその働きを引き継ぎ、1798年まで続けた。異教は文字通りのイスラエルを散らして踏みにじり、教皇制は霊的イスラエルを散らして踏みにじた。「異邦人の時（複数）」は、レビ記26章の二千五百年を表しており、それは二つの踏みにじりの期間を示している。第一は、アッシリア、ついでバビロン、そして異教ローマに代表される異教によって行われた。次に、ミラーが自ら用いた聖なる預言の枠組みの中で特定した第二の荒廃させる勢力は、1798年まで踏みにじりを継続する教皇制であった。異教と教皇制の双方による踏みにじり

という問題こそが、天上の対話において提起され、その対話をもたらす答えが、アドベンチズムの土台であり中心の柱である。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると別の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「常の献げ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きによって聖所も軍勢も踏みにじられることは、いつまで続くのですか。」そして彼は私に言った。「二千三百日までである。その後、聖所は清められる。」ダニエル書 8章13、14節。

天使ガブリエルとほかの天使たちは、ミラーに、「常のもの」は異教を表し、「荒廃の背き」は教皇主義を表すのだと理解するように導いた。異教も教皇主義も、聖所と軍勢を踏みにじるだろう。したがって、ルカが言及する異邦人の「時」は、千二百六十年の踏みにじりの二つの期間を指しており、それらを合わせるとレビ記二十六章の七つの時となる。

モーセの「誓い」のメッセージは、モーセのメッセージを宣べ伝えた使者エリヤとともに、1863年に殺された。モーセのメッセージとエリヤという使者の双方は、2001年9月11日以後に復活した。エリヤによって再び宣べ伝えられたモーセのメッセージの後、彼らは共に殺され、通りに放置され、千二百六十日のあいだ埋葬されないままであった。これは、ダニエルがモーセの「誓い」と呼ぶ「七つの時」のメッセージに直接結び付いている。ミラーとミラー派に象徴されるように、エリヤのモーセのメッセージを繰り返すその運動と使者は、最終的に自らの足で立ち上がり、復活するだろう。

そして三日半の後、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは自分の足で立ち上がった。彼らを見た者たちの上に大いなる恐れが臨んだ。彼らは天から「ここに上って来なさい」と告げる大きな声を聞いた。すると彼らは雲に包まれて天に上って行き、彼らの敵はそれを見た。黙示録 11:11、12。

この真実は次回の記事で取り上げます。